# 『ティマイオス』における無秩序な動について

国方　栄二
Eiji KUNIKATA

θεὸς ἀναίτιος, *Rep.*617E

プラトンにおける悪の問題は多く論じられているけれども，その最も重要な問題である「起源」については，いまだに一致した見解がない[1)]。その解釈として考えられるのは，次の二つである。
(i) 悪の起源 (原因) は物体 (身体) である。
(ii) 悪の起源 (原因) は魂である。

筆者は，これら二つの解釈のうち後者が正当な解釈であり，プラトンは一貫して悪の原因を魂としていると考える。『法律』十巻で，プラトンは魂がすべての運動変化の原因 (始原) であると述べ，その上で，魂は善と悪の原因でもなければならないと明言しているからである (896D)。ところが，上記の (i) の解釈をとる者たちの反論として最も有力視されているのは，『ティマイオス』の宇宙形成以前の動の記述である。30A や 52D–53A の記述をみると，宇宙を製作した神 (デミウルゴス) は，まったくの無から宇宙を作り上げたのではなく，無秩序に動くものを受け取って，これらに秩序を与えるという仕方で宇宙を作ったと言われている。善きものである神は，この宇宙を可能な限り善美に作り上げたけれども，これの対極的原理として無秩序な混沌が，神の全能を制限するものとしてかつて存在していたのである。(i) の解釈者たちは，それ故物体的なものが悪の原因とされているのだと主張する。本稿ではこの「宇宙形成以前の無秩序な動」について，第一にこの問題についてこれまで提出された諸解釈を検討し，第二に『ティマイオス』全体との関連で，プラトンがどのような意図の下にこれを語ったのか，ここの記述はどのような意味をもつのかを考察することによって，あらためて悪の起源についてのプラトンの見解を明らかにしてみたい。

---

1) プラトンにおける悪の原因についての諸解釈は，H.Cherniss[1], 23 n.1 に詳しい。

## 1

特に問題となっているのは,『パイドロス』や『法律』では，魂がすべての運動の原因 (始原) とされているけれども,『ティマイオス』では魂は宇宙とともに神によって製作されたとされていることである。すなわち,

(1) 宇宙形成以前に動が存在する。
(2) 神 (デミウルゴス) は，宇宙形成にさいして魂を作った。
(3) 『パイドロス』『法律』によれば，魂はすべての動の原因である。

いま，(3) の「すべての動」を厳密に考える限り，(1) および (2) と (3) とは矛盾する。この矛盾はどう解くのか。もし (3) の魂原因説を貫くのであれば，(1) もやはり魂が原因であるとせねばならないと考えられてきた。つまり，魂は宇宙形成の時に製作されたにもかかわらず，それ以前の動もやはり魂が原因であるとするのが，一つの可能な解釈として考えられた。けれどもそのさいに，(1) の記述は文字通り宇宙形成の「前」のことであるか否かということが，これに関連して問題とされる。実際，宇宙が「生じた」という一文をめぐって，古代のアカデメイアの時代から，それが文字通り (リテラル) の意味での歴史的時間的生成のことであるか否かについて論争されてきたのであり，もし文字通りの意味でなければ (以下これを比喩的解釈とする)，クセノクラテスが主張したと言われるような[2]，図形を描く場合のように内容をより理解しやすくするために，このような記述のやり方を用いたというように解釈することになる。この立場から説明を試みたのが Cornford である。

**解釈 1**　魂が動の原因である以上，(1) の動も魂が原因であるとせねばならないが，宇宙の魂は秩序ある動の原因でもある。したがって，魂の全体が，無秩序な動の原因であることは不可能であるから，宇宙の魂の一部分，すなわち非理性的な部分が無秩序な動の原因であり，他方，秩序ある動はその理性的な部分によって引き起こされると考えるのが Cornford の解釈である[3]。この解釈はすでに多くの人たちによって指摘されているように[4]，次の難点をもっている。『ティマイオス』の説明では，宇宙の魂は，その回転運動において，一方で感覚対象に関わる場合には，魂を構成する「異」の輪が進行して,「確実で真なる思わくや所信」が成立し，他方，推理計算の対象に関わる場合には,「同」の輪が動いて,「知識や知性」を完成する (37A–C)。このように,「同」と「異」の輪が関わる領域の違いから知識，知性と思わく，所信という違ったものが生じ

[2] Aristoteles, *De Caelo*, 279b32–280a1 (Cf. Simplicius, *In De Caelo*, 303.33–304.15; Alexandrus, *In Metaph.*, 819. 37–38).

[3] F.M.Cornford, 57, 176–177, 205, 209–210.

[4] G.Vlastos[1], 391–392; M.Meldrum, 65–67; J.B.Skemp, 78–82; T.M.Robinson[1], 78–82; J.S.Clegg, 53–54.

ても，宇宙の魂の動きは完全に理性的なあり方 (Cf. 36E4) を保っており，そこには非理性的な要素はないと考えるのが自然である。したがって，宇宙の魂には，Cornford が考えたような非理性的な部分はないと言わなければならない。

宇宙形成の比喩的解釈に対して，これを文字通りに解すべきだする解釈者も古来よりあった (以下これを字義的解釈とする) [5]。字義的解釈からの説明としてよく知られているのがプルタルコスの解釈である。

**解釈 2**　上記 (3) の原則が動かないものであるとすれば，宇宙の善き魂とは別に，悪しき非理性的な魂の存在を想定し，これが混沌の運動の原因であるとするのが第 2 の解釈である[6]。しかし，宇宙の魂に善なる魂と悪しき魂の二元的対立を読み込むことは，プラトンが『政治家』(270A) で二柱の神が支配していることを明確に否定していることからしても，まず不可能な想定である。この解釈は『法律』の「悪しき魂」(897C7,D1) についての誤った理解に基づいている。『法律』896D − 899C の神々の存在証明の中で，プラトンが善き魂の支配と悪しき魂の支配という選択肢を与えていることは事実であるが，それはその一方を，むろん善き魂の方を選ぶためである。つまり，ここでは魂が二つの可能的なタイプに類別されているだけで，現実に善悪二つの魂があって，そのいずれが支配しているのかと問われているのではないのである。このようにして，魂を無秩序の動の原因とする想定は，ともに失敗に終わっていると言うことができる。

さて，この問題について新たに一石を投じたのが Vlastos である[7]。Vlastos の解釈は，無秩序の動の原因が魂ではない，つまり魂原因説とは直接関係がないと考える点で，上記の二解釈とは異なっている。

**解釈 3**　第 2 解釈の方法は，(1) 宇宙形成以前に無秩序な動が存在し，そして，(2) 魂は神によって製作されたものであるという，この一見矛盾した記述を救うために，(1) についても，無秩序運動の原因である魂を想定した。つまり，この解釈は，魂はすべての運動の原因であるという原則が，宇宙形成以前にも当てはまるはずであると考え，したがって (1) にもその運動の原因である魂を想定した。そこで，この解釈が支持されえないとすれば，残るのはこの原則の適用範囲を制限する方法である。つまり，魂はすべての運動の原因であるが，この原則は宇宙形成以後についてのみ当てはまると考える。この解釈の方法は，

---

[5] 古代で字義的解釈をとった解釈者として知られているのは，プルタルコスとアッティコスである。プロクロスの「その他多くのプラトニストたち」(*In Timaeum*, I, 276.31– 277.1 (Diehl)) という言葉が，H.Cherniss[1], 423, n.356 と G.Vlastos[1], 384; W.K.C.Guthrie, 303, n.2 とでは，違ったふうに読まれているけれども，アカデメイアでいずれの解釈が優勢であったかは，史料も少ないので，あまり重要な問題とは思えない。

[6] *De Animae Procreatione in Timaeo*, 1014a–d; *Platonicae Quaestiones*, 1003a. J.B.Skemp, 74–78, 82–84, 111 の解釈も，基本的にはプルタルコスと同じ立場である。

[7] G.Vlastos[1], 390–399.

Hackforth, Earsterling, Robinson [8] らの解釈者によって支持されているが, Vlastos 自身は, 1964 年の論文ではこの説明の方法を断念している[9]。筆者はこの解釈の方法をとらないけれども, おそらく字義的解釈から,『パイドロス』『法律』の記述と両立させようとする試みとしては唯一可能な解釈と思われる。

**解釈 4** 最近では, 比較的多くの解釈者たちが字義的解釈に好意的であると言うことができるが, これに対して, 比喩的解釈の側からの代表的な解釈者が Cherniss である。第 1 解釈は本来理性的であるべき宇宙の魂に非理性的な要素を認めた点に無理があった。そこで, Cherniss は, 宇宙の魂が理性的な動きを見せながら, しかもその動から非理性的な動が生じる可能性を考えることによって,『パイドロス』『法律』で主張された魂の運動原因説を守ろうとした。つまり, プラトンが宇宙形成以前の混沌に動を与えることによって暗示しようとしたものは何かというと, 宇宙の完全に知的な魂は, 善き意図のもとに合目的的な動を引きおこすが, この動はさらに進むと, はじめに魂によってもたらされた動が意図するのとは違った方向に伝達されて, そのために不可避的に無秩序を生じる結果となる[10]。この Cherniss の見解は, すぐれた論点を含んでいるけれども, 宇宙の無秩序性が間接的, 第二次的な結果ではあるとはいえ, 理性的な魂に由来し, したがってデミウルゴスの創造行為を淵源とするものと考える点で, 筆者には到底支持できるものではない。しかし, この点は後に述べることにしたい。

**解釈 5** そして, これまで試みられた解釈で最後に残されたのは, はじめに述べた三つの事柄の間の矛盾と見られるものを, そのまま矛盾として認め, その調停を断念してしまう方法である。宇宙形成以前の無秩序な動は, 物体による自発的な動にほかならず, 他方形成以後の魂の働きとは, 運動そのものの原因となることではなく, これを制御し保つことでしかないとする。したがって,『ティマイオス』の創造神話の中では,『パイドロス』『法律』で見られるような魂の運動原因説は語られていないとする。これはむろん字義的な解釈に基づくものであるが, Vlastos が最終的に採用した解釈でもある[11]。

## 2

われわれは, いま述べた 5 つの解釈のうち初めの 2 つは今日ではほとんど支持されえないものと考えて, 第 3, 4, 5 の解釈の当否を中心に調べていくことにする。宇宙形成以前の無秩序な動きについて問題となっているのは, (a) これ

[8] R.Hackforth, 21; H.J.Earsterling, 31–38; T.M.Robinson[1], 93–97.

[9] G.Vlastos[1], 396, n.4.

[10] H.Cherniss[1], 444–450; L.Tarán, 384–388.

[11] A.-J.Festugière, 117–32; G.Vlastos[2], 414–419; R.D.Mohr, 116–138, 158–170.

らの記述が字義的なものであるか，あるいは (b) 比喩的な意味で語られているかという点と，(c) 混沌の無秩序な動は単にメカニカルな仕方で動いているのか，あるいは (d) そこでも魂が原因として働いているのかという点の 2 つである。第 4 解釈は (b) で (d) の立場であり，第 3 と第 5 の解釈は (a) で (c) の立場であるが，第 3 解釈は上に述べられた点で第 5 解釈とは異なる[12)]。

最初に第 5 解釈の立場から検討していくと，この解釈は先にも述べたように，混沌の動を物体の自己運動であるとするもので，したがって『パイドロス』『法律』で語られた魂の運動原因説との調停を放棄する立場である。しかしながら，この解釈は次のような理由から支持されえないように思われる。第一に，『パイドロス』では不死論証の中で語られているだけで，宇宙論や弁神論におけるその役割は未だ十分に明らかにされていないけれども，『法律』十巻では，自然主義的な無神論を信奉する物体主義者に対して展開されたのがこの魂原因説である。物体主義者とは，「火，水，土，空気が万物の最初のものであり」，これら原物質を自然と呼んで，魂のほうはこれら原物質から「後になって作られたもの」であると主張する者たちのことである。「ひとりでに働いて思考なしにものを生じさせるような原因」(*Soph.* 265C) を認めるこのようなドグマに対抗して，プラトンは神の製作活動が万物の生成の原因であることを説いてやまなかった。そして，これを魂の自己運動という枠組みの中で展開したものが『法律』の魂の運動原因説にほかならない。この『法律』の考えは『ティマイオス』でも同様によく働いており，46DE では，魂という「知力あるものに属する原因」こそが真原因であり，他方物体的なものは「他のものによって動かされて，また必然的に別のものを動かすという次元に属する原因」として「補助原因」としての位置に甘んじるものであることが正式に表明されている。『ティマイオス』はこのような目的論のマニフェストとも言うべき作品である。もしも宇宙形成以前に物体の「独立の」運動を容認するのであれば，これは『ティマイオス』そのものの意図に反したものになるであろう。34C では，魂は「生まれにおいても，力量においても，身体 (物体) よりもより先なるもの」であると明言されているのである。したがって，第 5 解釈に従えば，『ティマイオス』以外の著作のみならず，『ティマイオス』内部でも矛盾することになる。

第二に，この解釈と関連して問われなければならない問題は，『ティマイオス』の中で語られている「時間」の意味である。38B では，時間は「宇宙とともに生じた」と言われているので，宇宙の生成と言っても，それは時間の中での生成ではないということになる。したがって，宇宙形成以前にあった動とは，厳密には時間のない世界における動でなければならないはずである。つまり，「以前に」(52D4, 53A7, 8) や「その時」(53A2, 53B4, 69B5) の表現は，文字通り過去 (歴史) のある時点を指すものではないわけで，その中での動というものが，

12) 筆者の解釈は，後に述べるように (b) で (c) の立場である。

はたして真面目な意味を持っているのかがはなはだ疑わしくなってくる。このことは，第3解釈の可能性を拓くものとも考えられるが，これについては後で検討するとして，第5解釈の側からの対応がどのようなものであるかを見ておく必要がある。Vlastos はここで言われる「時間」が，先後の継起だけをもつ時間 (irreversible temporal succession —— 以下時間 (S)) ではなく，時計によって計測可能な規則的時間 (uniform and measurable time-flow —— 以下時間 (U)) であると考えることによって，この困難を免れようとした。つまり，神の時間製作とは時間そのものを作ることではなく，既存の動の流れを数的に計測可能なものとしたことでしかない。したがって，宇宙が生成する以前に継起的な動が存在することにはなんの支障もないと Vlastos は主張する[13]。けれども，Vlastos も認めているように，テキスト上でこの区別がはっきりと主張されているわけではないばかりでなく，さらにまた，この解釈はテキストそのものから反駁されるように思われる。そこで言われていたのは，「あった，あるであろう」の先後の時間的継起が時間の相 (εἶδη) として，昼夜，月，年という時間の部分 (単位) とともに，時間を構成する要素として生じたということである。確かに，Vlastos や Hackforth の言うように[14]，37E4–5 で時間と対比されているのは宇宙形成以前の状態ではなく，イデアの非時間的な永遠性であることは事実であり，また「あった，あるであろう」の時相が動であると言われている (38A2) けれども，問題は，そのことが時間 (S) が以前の無秩序状態に存在するという可能性を示しているのかどうかということである。テキストは，Vlastos の主張とは逆に，これらが「時間の相として生じた」(37E4, 38A7 –8) と言っているのである。Vlastos のように生成を字義的に解釈するならば，この言葉は時間 (S) と時間 (U) の区別がもともとプラトンにはなく，時間はもっぱら生成後の宇宙にのみあるのだということを教えるものでなければならない。またこれと関連することであるが，しばしば誤って解釈されるように，プラトンは天体の規則的運動がすなわち時間であると言っているのではない[15]。前者は計測するもの (つまり時計)，後者は計測されるものとして明確に区別しながら，時間は天体とともにありつづけ，消滅するときには天体とともに消滅する

[13] G.Vlastos[2], 409–414; R.Hackforth, 21–22. 二種類の時間を区別する考え方は，キケロの *De Natura Deorum*, 1, 21 に登場するウェレイウス (Velleius)，プルタルコス，アッティコス (Cf. Proclus, *In Timaeum*, I, 276. 31–277.7, III, 37.7–38.12 (Diehl)) にすでに見られる (したがって，G.Vlastos[2], 413 の 'no one in antiquity succeeded in seeing this' という発言は誤りである)。Cf. L.Tarán, 379; R.Sorabji, 270.

[14] G.Vlastos[2], 412; R.Hackforth, 22.

[15] 39D1 (χρόνον ὄντα τὰς τούτων πλάνας) は，惑星の彷徨がすなわち時間であるということではなく，惑星の各周期が時間の単位を構成するという意味である (Cf. H.Cherniss[1], 418, n.349.)。W.K.C.Guthrie, 300; R.D.Mohr, 55–67; 土屋, 22 にも同様の混同がある。

(38B) と言っているのである。おそらくこのような誤解の原因は，アリストテレスの『自然学』(VIII, 251b17–26) におけるプラトンへの批判にあるのであろう。時間は初めと終わりをもつ中間的なものであるから，時間はつねに存在しているはずであるというのが批判の主な根拠であるが，このアリストテレスの批判はプラトンの時間がある時に生じたと考えている点で，プラトンの時間論を理解し損ねていると言わねばならない。このように考えるならば,「宇宙は全時間にわたって終始 (διὰ τέλους τὸν ἅπαντα χρόνον) あったし，あるし，あるであろう」(38C) という言葉は矛盾以外のなにものでもないであろう。けれども，時間がない時があったとか，時間がある時に生じたとかいうことではなく，むしろ常にあった，ある，あるであろうという「時間形式そのもの」を宇宙とともに製作したと言われているのである。以上のような理由から，われわれは第 5 解釈を支持することはできない。

次に，その他の解釈を検討してみたい。先ず，(A) もっとも重要な問題点は，第 4 解釈の言うように，宇宙形成以前の動の原因も魂であると言うことができるかどうかということにあるので，この点について調査してみなければならない。また，(B) すでに述べたように，第 3 解釈は，魂の運動原因説を秩序ある宇宙にのみ限定することによって，この原則が『ティマイオス』においてもなお堅持されていると考えるものであるが，このように限定するためには，生成の以前以後のあり方が根本的に異なっていると想定するのでなければならない。そこで，宇宙が生じる以前にそれぞれの仕方で存在していたと言われているのは「あるもの」「場」「生成物」の三つであるが (52D)，それらのあり方，とりわけそこに生ずる振動 (σεισμός) によって動いている物体，より正しくは物体の痕跡 (ἴχνη) と呼ばれるものが，われわれの宇宙における物体のあり方とはたして異なったものであるのかについて考察する必要がある。

『ティマイオス』で宇宙形成以前の混沌について触れているのは，30A の神 (デミウルゴス) が無秩序に動くものを受け取ったというだけのごく短い記述と，52D–53A の比較的長い記述である。後の箇所によると，場 (生成の乳母とも呼ばれる) は，性質の同じでないような，釣り合いを欠いた諸力によって満たされているために，そのどの部分もつり合いを失い,「場自体がそれら諸力によって振動させられ，逆にまた動きながらそれらものを振動させた」(σείεσθαι μὲν ὑπ' ἐκείνων αὐτήν, κινουμένην δ' αὖ πάλιν ἐκεῖνα σείειν , 52E) という。ここで言われている「諸力」とはむろん四元 (火，水，空気，土) の諸力のことであるが，運動や知覚的性質に関わる力を指していることは，56C4 から分かる (場における現象は，52E1 の μέν — δέ の対比が示すように，運動と知覚的性質の二つの面から述べられる)。

さて，上で述べた (A)(B) について順に考えてみたい。最初の問題は，(A) この振動 (σεισμός) の直接の原因はある特定のものとして語られているかということである。先ず，テクストのどこにも魂への言及がないので，その原因が魂

と考えることはできないと思われる。田中氏は，時間が後から作られたものであるから，万有の最初の動きと宇宙の成立が「同時」であると考えれば，場の運動が知性 (あるいは魂) に由来すると考えることになんの不都合もないと主張している[16]。おそらく，氏は上記の (a) と (d) という可能性を考えているようであるが，しかし，この問題はこれで片づいてしまうのではないように思われる。時間的な先後関係が実際にはないとしても，知性が働きかける以前に混沌の動があったと言われていることには，重要な意味がなければならないはずである。いわば論理的な先後関係があるはずであり，いまはそれが何かと問われているからである。次に，場や四元がそれ自身で運動していると言うこともできない。先の 52E4–5 は，場と四元の相互間の動の伝達を語っているだけで，他動のみの記述でしかないからである。この箇所において，強いて動の原因となるような説明を求めるならば，52E1–3 で性質が異なり釣り合いを欠いた諸力に満たされるために，場の内部に不均衡が生じると言われていることであろう。したがって，Vlastos や Mohr が，この運動は魂が原因ではなく，純粋にメカニカルな理由によって動いていると言ったことは，その点では正しいように思われる。けれども，それが無秩序な動の発端であると言うことは，魂を動の原因であるとするのと同じ程度に不可能であろう。というのは，もし不均衡な構造をもった二つの事物を並べたとしても，それによってそこに動が生じるわけではないからである。事物あるいは場の不均衡から生まれるのは，動の伝達の可能性ということでしかない。したがって，動の伝達そのものはメカニカルな仕方でおこなわれるけれども，Vlastos や Mohr が考えたようにそのことが運動の発端であるのではなく，むしろここの記述にはその直接の原因となるものは語られてはいないと，つまりここは他動のみの記述に終始していると言わなければならない。

動が何によって生じるのかについては，57D–58C で語られている。動は，動かすものと動かされるものがなければ存在しえないが，その両者が均等な状態にあれば動は不可能であると語られている。すなわち,「静は均等性 (ὁμαλότης) の中に，動は不均等性 (ἀνωμαλότης) の中に」(57E7–58A1) 置かれるのである。そして，不均等性の原因は不等性 (ἀνισότης) であり，後者については既に述べられたと言われているのは，上の 52E の議論を指している。そこで問題となるのは，はたしてここで言われる不均等性や不等性による説明が動が成立するための十分な条件 (原因) を示すものであるのどうかということである。Cornford が注意しているように[17]，動かすもの (57E4) は魂のことではなく，ここでは不均等性だけによる動の伝達が述べられているわけで，したがって，不

[16] 田中, 441–442.

[17] F.M.Cornford, 240, n.1,'Obviously the mover here cannot be the soul,which belongs to a higher order of existence'. Cf. T.M.Robinson[2], 149.

均等性だけで物体の動が自立的に起こると言われているわけではない。けれども，ここの箇所が52D–53Aの箇所と異なっているのは，前の議論が宇宙形成以前の動のみについての記述であること，つまり48Aで約束されていた「必然」(ἀνάγχη) —— 彷徨する種類の原因 —— がそもそもいかにして動を生ずるかという問いに関する記述であるのに対して，いまの議論では続く58A2–C4の箇所において，そういう動のいわば必要条件的な話にとどまらず，「混ぜなければならない」(48A6) という表現が暗に示していたように，「必然」に対する「知性」(νοῦς) の働きかけが述べられていることである。この部分の議論は，それぞれの事物がなぜ種類別に完全に分離してしまって，不均等性による動や生成が終止してしまわないのかを論じている。ここでも，万有の回転運動 (あるいは円周) がすべての事物を圧縮して，そこにいかなる空虚も生じないようにしたことが動がたえず維持されていく原因であるというように，一見きわめてメカニカルな理由を与えているのであるが，よく注意すれば，直接の理由となっているのは，万有の形状が円環的で自分自身へと回帰していくことにあることが分かる。ここの περίοδος が回転運動と円周のどちらのの意味か，χυχλοτερής が円運動ということか丸い (円環) ということなのかで，魂の運動を直接語っているのか，単に万有の形状に触れているだけなのかというように解釈が別れるところであるけれども[18]，一歩譲って仮にここが形状についてのみ言及しているだけとしても，宇宙が円環的 ( あるいはむしろ球形) であること (33B) が知性をまってはじめて可能である (34A) ことを考えれば，ここでは知性による働きかけが述べられているとしなければならないはずである (言うまでもなく，場はそれ自身の形状がない[19])。知性が動を直接引きおこすことはないから，ここでは直接語られているわけではないけれども，動の原因と言えるものはやはり「魂」であり[20]，他方，知性はその動を維持し保つものとして考えられていると言わなければならないだろう。つまり，57D–58Cが52D–53Aと異なっているのは，前者が宇宙形成の以前の動の記述であるのに比して，後者は，神 (デミウルゴス) が宇宙形成に入った後のことが述べられていることであり，しかもここでは動が成立するための必要十分な条件が示されているのだと思われる。さてわれわれは，以上の考察を通じて次の二つの点を確認した。

(1) 宇宙形成以前の記述 (52D–53A) には，(i) 魂への言及は一切なく，しかも (ii) 動の伝達の必要な条件を示すだけで終わっていること。われわれの解釈は，(i) の点で第4解釈と異なり，(ii) の点で第5解釈と異なる。

---

18) Cf. R.D.Mohr, 128ff.

19) Cf. 51A. したがって，R.D.Mohr の 'Plato specifically tells us that the shape of space is round' (149) という発言には同意できない。

20) 『ティマイオス』では，魂の運動原因説は直接的には一度も語られていないが，37B5, 46D5–E2, 77C1–5, 89A1–3 の四箇所で暗示されている。

(2) 魂の運動原因説は，明示的に語られているわけではないが，しかし，宇宙形成後の動の記述 (57D–58C) では，それが前提されていると言えること。この点で，われわれの解釈は第 3，第 4 解釈と同じであり，第 5 解釈とは異なる。

次に，(B) 宇宙形成以前にあったものは 50B6 では物体と呼ばれているが，厳密には物体そのものではなく，物体の「痕跡」(ἴχνη, 53B2) であった。そこで，宇宙形成の前と「形と数でもって形象化」(53B4–5) された後ではそのあり方はどのように違っているのかについて考えてみたい。第 3 解釈の要点は，場に現れる物体のあり方が宇宙生成後とは「あらゆる意味で違った存在で，ほとんど記述不可能」[21] なものであるが故に，魂の自己運動説との矛盾はないと考えることにあった。もちろん，イデアが場に投影されて現れるその映像がいわゆる物体であるという場の記述の方式 (50C 以下) そのものは言うまでもなく宇宙生成以後にも成立するのであるが，問題は，物体の痕跡と言われるとき，それが現在の物体のあり方とまったく異なったものという意味なのかどうかということにある。痕跡という言葉は，Robinson らの主張とは逆に，まったく物体になってはいないということではなく，むしろある段階まではそれが完成されていることを予想させる。「形と数」はその後に続く正多面体のもつ幾何学的構造を指すので，そのような構造そのものはまだ持っていないが，一部物体としてのあり方をしているもの，あるいは不完全ながらすでに幾何学的構造を持っていたものが[22]，ここで物体の痕跡と呼ばれているのだと思われる。そうすると，魂がすべての動の原因であるとすれば，なぜ宇宙形成の前に動があるのかがどうしても不明となってくる。すなわち，物体の痕跡が存在し，そこに動があるのなら，字義的に考えるかぎり矛盾は避けることができない。したがって，われわれは生成の前後の物体のあり方がまったく違っているが故に，魂原因説とは矛盾しないという説明には同意できないのである。けれども，この痕跡という表現は，Vlastos が考えたような[23]，無秩序でありながら部分的にすでに秩序を有するというような自己矛盾の (self–contradictory) 概念でもない。もし「物体的ではないが，まったく非物体的でもない」[24] ことを秩序の有無という観点と区別できるならば，そこにはなんらの矛盾もないことになる。つまり，物体が無秩序状態にあることは，その生成や運動のメカニズムがいまだ完全なものでないということではなく，仮にそれが完成されたとしても，物体が補助原因 (συναίτιον) に留まる定めにある以上は，「思考を欠き，ただ出まかせのも

[21] T.M.Robinson[1], 97.

[22] Cf. R.D.Mohr, 108ff.; 土屋, 23–24. もっとも，53B5 の与格形は instrumental dative であって，respect (Mohr, 111) の意味ではない。

[23] G.Vlastos[1], 390.

[24] T.M.Robinson[2], 148.

のを無秩序にその都度作り出すだけの原因」(46E5–6) の身分を越えることはないわけで，したがって，物体的なものは,「他のものによって動かされて，また必然的に他のものを動かす次元に属する原因」(46E1–2) として真の原因のための補助的なものという位置を与えられても，それ自体としては宇宙生成以後も依然として無秩序な状態にあると言うことができる。プラトンにとって，完全なるメカニズムは，われわれの普通の想念とは違って，無秩序以外のものではなかった[25]。そして，もう一方の真の原因は，これも 46DE から明らかなように,「知性」あるいは，知性をもつにもっともふさわしい「魂」である。神による秩序づけと言われるものは，このように，知性を持つことのできる魂をまって始めて可能になるもので，魂原因説は宇宙形成に不可欠のものだと考えられる。そこで，以下のような結果が得られる。

(3) 物体が，イデアが場に投影された映像であるというこの図式そのものは，宇宙形成以後も成立し，第 3 解釈のように，その前後をまったく異なったものと考えることはできない。むしろ宇宙の秩序づけは，知性，したがって魂の導入によって始めて可能となる。

われわれは，以上述べたように，第 3，第 4，第 5 の解釈のいづれにも完全には賛同できないので，そこであらためてプラトンが宇宙形成以前に無秩序な動があったと言ったその意図を考えてみることにしたい。

## 3

われわれは，上記の解釈の可能性のうちで，(b) で (c) の立場をとる。つまり，宇宙形成以前の動は，比喩的な意味しかもたないと解する。その理由を次に述べよう。第一に，この混沌のあり方を語るさいに，ソクラテス以前の哲学者たちが使った表現が目立っていることはしばしば注意されている通りである[26]。しかも，そのような記述そのものをプラトンは否定しているわけではない。プラトンが『ティマイオス』の中で認めないのは，このような動のあり方を真原因とする考え方である。53B3–4 で,「なにものたりとも神不在の場合にはさぞやかくあらんというようなあり様だった」と言われているように，いまだ知性や魂が働いていないそのような状態を，無秩序的動の直接的な原因を故意にぼかしつつ，描写することによって，かえって真の原因の所在を明らかにしようとしたのではないかと思われる。そして，宇宙の形成によって，初期宇宙論を模した比喩的世界からプラトンの世界となる。

---

[25] Cf. G.Vlastos[1], 398,n.2. ただし，'mechanism nevertheless does contain an order of its own' は，言葉として無意味であって，思考の矛盾ではないだろう。

[26] Cf. W.K.C.Guthrie, 291–292.

第二に，宇宙の形成以前の動を比喩的に解するとしても[27]，ミュートスという口実は，そのような脈絡の中に隠されている意図が明らかにされて，初めて受け入れられるはずである。そこで，なぜプラトンはあえてこのような記述の方法を取ったのかを，別の面から考えてみる必要がある。われわれは，物体がかつて宇宙が誕生する以前に自発的に動いていたとか，あるいは，それらをなんらかの仕方で魂が動かしていたとかいう解釈には従えないことを既に論じたのであるが，もしも物体がその動の直接の原因であるとすると，魂が物体 (あるいは身体) とともにあることから生ずるもろもろの悪は，その原因が物体にあって，結局「魂には責任がない」(決定論) ことになる恐れが生じてくる。しばしば引き合いに出される 86B–D の箇所で，魂の病気 (悪) が身体的条件 (σώματος ἕξις) に起因するという趣旨のことが述べられていて，多くの解釈者はここに決定論を読み取っているけれども[28]，もちろん魂のあり方がその自律性 (autonomy) まで失われるような仕方で身体的条件によって決まると考えているわけではない。身体の構成要素の不自然な過不足が内部的な不和をもたらして身体や魂を混乱に陥れるというのが，82A やこの箇所での病気の説明であるのだが，心身を一つの共同体として教導する主体はいずれも魂であって，当の魂自身が可能な限り立派で善きものであるように準備することが大切であると語られている (89D) のは，プラトンのこれまでの主張となんら変わるところがない。物体 (身体) はたしかに魂を無秩序な混乱した状態に至らせるけれども，悪の原因 (責任) は魂あるいは魂の無知にあるのであり，その点では，物体 (身体) はもともとニュートラルなものであると思われる。そして，この考えは『ティマイオス』では神 (デミウルゴス) が誕生した人間の魂 (不死的魂) に告げる掟 (ノモス) の中に読み取られる。すなわち，魂は身体の中に必然的に植えつけられると，感覚，快苦と混じりあった愛欲，恐怖，怒り，その他これらに付随するもの，これらとは反対の性質のものが生じることになるが，そのようなものを魂が克服するならば，正しい生き方をすることになり，それらに征服されるなら不正な生き方をすることになる。そして，魂が悪をやめないかぎり，次々と輪廻転生をくりかえさなければならないけれども，四元 (火，水，空気，土) の騒々しい理(ことわり)のない状態を言論を用いて克服するならば，初めの最善のあり方に戻るこ

[27] Cornford が，28B6 では ἀρχή を 'source' と訳しながら，次行の B7 では 'beginning' という訳語を当てていること，また，30A3 を 'all that is visible' と訳しているのは，明らかに不当である。Cornford は，宇宙が生じたとは語られていないと主張しているわけで，この点では，説明の便宜のため (διδασκαλίας χάριν) に宇宙生成が語られたとする，クセノクラテスのもともとの比喩的解釈とは違っていると言わなければならない (Cf. R.Hackforth, 18.)。けれども，字義的であるか否かは，けっしてこのような言葉の問題ではない。

[28] A.E.Taylor, 610–614 など。これに対する反論としては，W.C.Greene, 306 がすぐれている。

とができる (41E–42D)。これとまったく重なる思想が,『法律』では万物を支配する魂について語られている。つまり，魂は自らの動によって，天地，海にあるすべてを導いている。それらの動は第一次的な動であり，それらがそのさい物体の第二次的な動を受け取って，万物に運動変化を生じさせるが，魂がそれらの物体的な運動変化を用いる場合に,「知性」を援助とすれば万物を正しく幸福に教導することになるが,「無知」と一緒になるならばそれとは反対の状態にしてしまう (896E–897B)。これらの箇所は人間の魂と宇宙の魂という違いはあっても，語られている思想そのものは同一の事柄であって，しばしば指摘されるような『ティマイオス』と『法律』の間の矛盾というようなものではないと言うことができる。魂は，このような意味において善と悪の原因 (プシューケー・アイティオス) なのである。悪の起源を物体的なものに見ようとする見解はプロティノス (*Enneades*, I, 8) 以来固定化した観があるけれども，それはかえって善悪の責任の所在を不明瞭にすることになるであろう。

ところで，宇宙形成以前の動の原因は何かという問題についてこれまで多くの解釈が試みられ，しかもこれがもうひとつの問題，つまりそもそもこの創造の記述が字義的なものか否かという問題と不即不離の関係にあることは先にも触れた。そして，古代からの『ティマイオス』解釈はキリスト教の創造の問題とも絡んで，これらの問題に集中してきたと言ってよいであろう。けれども，無秩序の動の直接の原因が何かとか，あるいは創造が文字通り現実のものか否かといった問題が，プラトンにとってほんとうに主たる関心事であったのかについて，筆者は少し疑問を抱いている。いま『ティマイオス』の記述をよく見ると，神 (デミウルゴス) は創造行為のすべてに携わるのではなく，創造がある段階にまで達すると製作された若い神々に残余の創造の仕事を託して，自らは創造以前のもとのあり方に戻っている (42E)。その残余の仕事とは人間の種族を作る仕事であるが，神は神々にこれを委ねることによって，人間が作られて後に重ねていく「その後の悪については責任がない」(42D3–4) ようにしたのである。神には悪の責任がないというこの思想は，冒頭に掲げた『国家』のエルのミュートスの箇所にも含意されているが,『ティマイオス』でもきわめて重要な意味をもっていることは言うまでもない。29E では，神が「すべてのものができるだけ製作者自身によく似たものになることを望んだ」ことが，宇宙生成のもっとも決定的な始めであったと言われている。それは製作者の善性にできるだけ似たものになることにほかならない。このように，神はつねに善のみの原因であるといういわゆる弁神論的な関心が，われわれの問題についても，一番強く働いていたのではないかと思われるのである。

そこで，もしわれわれが無秩序な動の淵源を魂に求めるとするならば，それから生じてくる混乱はもともと魂によって引き起こされたものと考えなければ

ならなくなってくる。そうするとHerterが批判しているように[29]，それがたとえ偶然的に，第二次的に起こってくるものではあっても，製作者である神はやはりその責任を免れえない結果となろう。第4解釈は『法律』の刑罰理論の中の不正と損害の区別に関する議論(863A以下)と近似しているように思われるが，製作神の場合に決定的に異なっているのは，『国家』(II379B)ですでに述べられていたように，神はすべてのことの原因ではなく，善きことのみの原因であるということである。もし第4解釈が正しければ，宇宙にも人間にも同じように悪があることになるはずであるが，しかし，実際には悪が生じるのは人間にだけである[30]。そして，人間の場合にだけなぜ悪が生じるのかが問題なのである。『ティマイオス』でも，上の掟を今後の悪に対して責任がない(ἀναίτιος)ように申しわたすと，若い神々にそれ以後の仕事を託したと語られている。すなわち「死すべき生きものを，それが自分で自分の悪の原因となる場合は別として」(42E3-4)最大限りっぱによく導くようにと。これらの点を顧慮するならば，なぜプラトンがエイコス(ありそうな)と断っていながらも，混沌についてこのような記述をしたのかを理解することができる。つまり，物体的なものは悪の原因ではないとしても，無秩序化の淵源がそこにある以上は，神(デミウルゴス)をそれからできるだけ離し，それを受け取る(παραλαβών, 30A4)という形にする必要があったのであろう。これはなぜ神が作った魂が過ちを犯すのかという弁神論の問題に関わっている。もし魂が無秩序の動の直接的原因であるとすれば，「神に責任がある」という非難は免れえない。こうして見ると，魂を製作した上で，神が魂に語りかけた意義はきわめて大きいように思われる。(知性である)神が魂に知性(思慮)を与え，そして魂がその知性とともにあるとき，魂は正しいのである。知性が魂を導くという点で，知性あるいは神こそが原因であるとも言えるけれども，しかし直接的には魂が原因なのである。つまり，選ぶものは魂であるということである。善悪の原因はあくまでも魂であり，そして「神には責任がない」(テオス・アナイティオス)。宇宙形成以前の混沌の記述は，このような意味においてプラトン苦心の弁神論であったと言うことができる。

魂の堕落が身体とともに始まることは，たしかにプラトンの古くからの前提である。身体を魂の墓(σῶμα σῆμα)とするいわゆるオルペウス教的思想からの強い影響下にあるとされる『パイドン』では，「身体的な悪」(66B6)とまで極言されているし，また，『政治家』のミュートスでも，秩序ある進行を保つという宇宙の義務感が徐々に鈍化していくのは，宇宙の組織内に含まれる物体的なもののためで，それが現在の宇宙に到達する以前に多くの無秩序にあずかっていたからである(273B)と説明されている。物体(身体)のいわば「ティタン的

29) H.Herter, 333, 338.(R.D.Mohr, 127, n.38の批判は当たっていない。)
30) 『テアイテトス』176A参照。

本性」[31] が混乱と無秩序の原因として根深くひそんでいるわけであるが，しかし，『パイドン』においても，主人となって支配するのは魂であり，身体は隷属し支配されるものであるし (80A1–2)，『政治家』でも，直接的には宇宙が神の教えを忘却したことが鈍化の原因である。つまり，魂が善悪について主導的位置にあるということは，一貫して守られていると言えるわけで，ここに扱われた『ティマイオス』でも，物体的なものが魂を混乱に陥れても，それは必然的，強制的に不正を起こさせるというような意味からではなく，やはり魂がそれを選んでいく位置にあると思われるのである。

(関西大学非常勤講師)

## 参照文献


[1] Cherniss[1], H., *Aristotle's Criticism of Plato and the Academy*, 1944.

[2] Cherniss[2], H., The Sources of Evil According to Plato (orig.1954), *Selected Papers*, 1977.

[3] Clegg, J. S., Plato's Vision of Chaos, *Classical Quarterly*26, 1976.

[4] Cornford, F. M., *Plato's Cosmology*, 1937.

[5] Earsterling, H.J., Causation in the *Timaeus* and *Laws* X, *Eranos*65, 1967.

[6] Festugière, A.–J., *La Révélation d'Hermès Trismégiste*, II, 1950$^2$.

[7] Greene, W. C., *Moira: Fate, Good, and Evil in Greek Thought*, 1944.

[8] Guthrie, W. K. C., *A History of Greek Philosophy*, V, 1978.

[9] Hackforth, R., Plato's Cosmogony (*Timaeus* 27dff.), *Classical Quarterly*9, 1959.

[10] Herter, H., Bewegung der Materie bei Platon, *Rheinisches Museum für Philologie*100, 1957.

[11] Meldrum, M., Plato and the ΑΡΧΗ ΚΑΚΩΝ, *Journal of Hellenic Studies*70, 1950.

[12] Mohr, R., *The Platonic Cosmology*, 1985.

[13] Robinson[1], T.M., *Plato's Psychology*, 1970.

[14] Robinson[2], T.M., The *Timaeus* on Types of Duration, *Illinois Classical Studies*11, 1986.

[15] Skemp, J. B., *The Theory of Motion in Plato's Later Dialogues*, 2nd ed., 1967.

[16] Sorabji, R., *Time, Creation & the Continuum*, 1983.


[31] W.C.Greene, 59–60.

[17] Tarán, L., The Creation Myth in Plato's *Timaeus*, J.P.Anton & G.L.Kustas eds., *Essays in Ancient Greek Philosophy*, 1971.
[18] Taylor, A. E., *A Commentary on Plato's* Timaeus, 1928.
[19] Vlastos[1], G., The Disorderly Motion in the *Timaeus* (orig.1939), R.E.Allen ed. *Studies in Plato's Metaphysics*, 1965.
[20] Vlastos[2], G., Creation in the *Timaeus*: is it a fiction? (orig.1964), R.E.Allen ed. *Studies in Plato's Metaphysics*, 1965.
[21] 田中美知太郎, 『プラトンII—哲学(1)—』, 1981.
[22] 土屋睦廣, 「プラトンにおける悪と物体の問題 —— 『ティマイオス』の宇宙生成論をめぐって —— 」, 日本倫理学会『倫理学年報』, 1991.